

表現と鑑賞を関連付けた題材構成の工夫

—— 感受する力を支えとした指導と評価の在り方 ——

音楽科研究会議

研究員 土谷 知香（川崎市立東高津小学校）

日高 美鈴（川崎市立西生田小学校）

三浦 芳子（川崎市立生田中学校）

神谷 由理（川崎市立麻生中学校）

指導主事 仲野 雅子

I 主題設定の理由

音楽科の教育課程編成においては、学習指導要領に定められた内容項目を適切に題材に構成し、年間の指導計画にバランスよく配置していくことを基本としている。しかし、題材構成に当たって本来第1番目に見定めるべき「この題材では子どもたちにどのような音楽的な力を身に付けさせるのか」という指導者側の意識は、稀薄になりがちである。「この教材曲をどう扱うのか」が先行してしまい、歌う、楽器を演奏する、創作する（音楽づくりをする）、音楽を聴く等の音楽活動が目前に展開されてさえいれば、さらに、そこに子どもたちの意欲的な取組状況が展開されていれば、それであたかも音楽科の目標が実現しているかのような錯覚に陥っている授業例が散見される。

題材の構成は、大別して、次の3つのタイプに分類することができる。

a 特定の領域・分野で構成する（例：歌唱、鑑賞等単独の領域・分野で指導する）

b 表現領域における複数の分野を関連付けて構成する（例：歌唱と器楽、器楽と創作等表現領域の中で複数の分野を関連付けて指導する）

c 表現領域と鑑賞領域を関連付けて構成する（例：歌唱と鑑賞、器楽と創作と鑑賞等表現と鑑賞の両方の領域で関連付けて指導する）

本研究会議では、特にc表現と鑑賞を関連付けた題材構成について工夫することが、音楽科の学習の全ての支えとなる「音楽を形づくっている要素を知覚し、音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取る」感性を高めることに資すると考え、授業実践を通して指導と学習評価の在り方を探っていくこととした。

II 研究の内容

小学校・中学校のそれぞれにおいて、表現と鑑賞を関連付けた題材構成を工夫し、その題材における指導と学習評価の在り方について研究する。

1 研究の方法

研究を始めるに当たり、市内小学校において一般的に実施されている表現と鑑賞を関連付けた題材構成による授業を行い、その有効性と留意点について確認し、研究の方針を立てた。関連付けるとは、並列に順序立てて指導するという意味とは異なる。しかし、その意義について特段の意味合いを考えずに順番に指導されているに留まっている現状がある。関連付けるとは、どのようなことを指すのか、関連付けることができるためには、教師のどのような手立てが必要であるのか、このことを確認した上で、研究に取り組むこととした。次に、小学校、中学校のそれぞれにおいて、表現と鑑賞を関連付けた題材構成が有効であると考えられる指導と学習評価の在り方を提言できるよう、授業実践を行うこととした。

(1) 表現と鑑賞を関連付けるとは

音楽科では、表現、鑑賞のどちらの領域においても、〔共通事項〕に示されている「音楽を形づくっ

ている要素」や要素同士の関連を知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じることが学習の基盤となる。この支えが脆弱な授業では、子どもたちは、「なぜこの技能練習をしているのかわからない」「教師の一方的な技能の教え込みを受けとめるだけ」「何のためにグループで話しているのかわからない」「聴いた音楽について自分の意見を述べるのが苦痛」等の状況に陥ることになる。また、一方で、〔共通事項〕でつなごうとするあまり、〔共通事項〕を教え込んでしまったり、知覚の段階までで指導が留まってしまったりすることもある。このような音楽の学習に陥ることなく主体的・創造的に音楽の学習を進めるためには、音楽の学習の基盤となる「音楽的な感受」の感性を高める過程を大切にしたい。題材の構成は欠かせない。本研究では、複数の領域・分野や教材で、同じ「音楽を形づくっている要素」を知覚・感受し、共通点や相違点を手掛かりにそれぞれの音楽の特質や雰囲気を探る学習が、こう表現したいという思いを深めることや、鑑賞曲のよさを味わうことに有効であるものとして、実践を通して考えていくこととした。中でも、関連付けるものを表現と鑑賞に絞り、表現と鑑賞の両方の領域において、共通の「音楽を形づくっている要素」を設定し、表現で感受したものを鑑賞でも感受する、逆に鑑賞で感受したものを表現で感受する題材構成を試み、その効果を検証することとした。

(2) 表現と鑑賞を有効に関連付けるための手立て

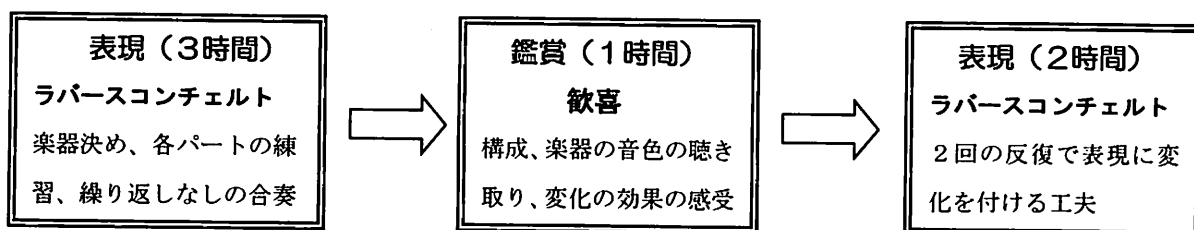
① 関連付けることの視点を確認するための授業

市内小学校6年生では、「いろいろなひびきを味わおう」という題材で、合奏と鑑賞を関連付けた授業が一般的に行われている。この題材では、反復するたびに演奏する楽器が変化することによる音色や音の重なりの変化を感じ取って、「歓喜」では、その面白さやよさを味わい、「ラバースコンチェルト」では、楽器の音色や重ね方を工夫して合奏する。

〈題材の目標〉

- ・楽器の音色や音が重なり合う響きとそれらの違いを聴き取り、その変化を感じ取る感性を高める。
- ・音色や音量等の楽器の特徴を生かして、全体の響きのバランスに気を付けながら、組み合わせを工夫して合奏する能力を育む。

〈題材構成〉



② 表現と鑑賞を関連付けた題材構成で大切にす る4つのポイント

「歓喜」は、正確な3回の反復の形で構成されており、音色や音の重なりを比較して聴き取りやすい楽曲である。鑑賞の学習では、図1のようなワークシートを使用した。本児童は、「歓喜」の鑑賞で、反復するたびに異なる音色や音の重なりによる響きを知覚・感受することができ、「繰り返しの変化が面白い」と、この曲のよさを味わっている。また、そのことが、「ラバースコンチェルト」の表現の工夫につながっていった。

★同じ旋律をくりかえすたびにどんな変化があったかな？

	1回目	2回目	3回目
音色	弦楽器で流石	金管楽器で流	打楽器(お祭
響き (〇〇感じ)	さびれて流石の な感じはなか に流石な感じ とて響きな感じ した。	響き(木管楽器)最大 に響きな感じ した。	最後は響きな 感じ(木管楽器) に響きな感じ した。
強弱	弱く(P)	強い(f)	強い(fff)

★この曲のおすすめポイントはどこかな？

弦楽器 → 木管楽器 → オーケストラ
響き(木管楽器)最大に響きな感じした。

とて最後(3回目)の色んな楽器の重なりを聴き取りました。

図1 鑑賞のワークシート 記入例

合奏のイメージをもつということだけを考えれば、「ラバースコンチェルト」の節奏を聴いて表現を工夫することも可能である。しかし、ここで、自分たちの合奏とは構成楽器も音の厚みも異なる楽曲からこの音楽の要素を聴き取ることによって、感受の質が高まったと考えられる。

続く「ラバースコンチェルト」の表現を工夫する場面においても、鑑賞における知覚・感受と対応するように1回目、2回目の表現を工夫させ、どうしてそう考えたのか、変化させてどうだったかを記述する欄をワークシートに設けた。「歓喜」の曲の構成に見られる変化の効果をラバースコンチェルトの表現に生かしたいという子どもの思いは十分に高まっており、「だんだん華やかにする」「1回目よりは2回目を強くする」「2回目には、太い音色の楽器を選ぶ」等の妥当性の高い工夫が見られた。その工夫を試しながら、このように演奏したいという思いが膨らみ、楽器の演奏の練習にも意欲的に取り組む姿が見られた。また、図2における波線部分の教師の助言のように、思いが高まったところでその思いが表現の豊かさにつながるような、楽器の音色や音量、音域等の特性に関する教師の言葉掛けが必要であることも確認できた。さらに、「ラバースコンチェルト」の演奏をグループごとに発表して聴き合い、表現の工夫について意見交換する場面において、「音を強くして『歓喜』のように変化させていったところが工夫されていたと思いました。」

児童 A: 1回目から主旋律が鍵盤ハーモニカ2人で、かざりの旋律も鍵盤ハーモニカ2人だと、音色が同じで音がうるさくない？
児童 B: 1回目はリコーダーに全員変えてみたら？
教師: リコーダーと鍵盤ハーモニカの音量の違いも考えてみよう。
児童 C: 鍵盤ハーモニカの方が大きいから、主旋律がリコーダーならかざりの旋律もリコーダーの組み合わせのほうがバランスがいいね。
児童 D: 1回目はリコーダーが中心で、2回目は鍵盤ハーモニカ中心に変化させてみよう。

図2 表現の工夫のグループでのやりとりと教師の関わり

「1回目と2回目で楽器を変えて、華やかに終わるところが工夫されていたと思いました。」等の発言が見られた。他のグループの演奏を聴くという学習活動が、形式的な発表の場に終わらず、知覚・感受を伴った意味のある活動に高まった。

これらのことから以下の4点を研究の視点として授業実践を考え、試みることにした。

- 適切な教材選択と組合せ・・・題材で身に付けさせたい力に沿って教材を選択し、それぞれの教材曲の音楽的特質を指導者が的確に把握して、要となる〔共通事項〕を設定する。
- ワークシートの工夫・・・音楽を形づくっている要素と要素同士の関わり合いを感じ取って聴くことができ、そして知覚・感受したことを思考の流れに沿って記述しやすい項目を立て、記述欄を工夫する。
- 協同的な学習・・・子ども同士で話し合い関わり合う場を設定し、音楽的な感受を支えとしながら「自分はこのように表現したい、この曲のよさはこんなところだ。」等の言葉等を用いて思考・判断させる。
- 思考を促す発問と言葉掛け・・・教師が子どもの姿をよく見取り、適切な教師の投げ掛けによって子どもの思考を深めていく。特に、領域の接続部分で関連性を意識させる言葉掛けを有効に行う。

2 授業の実際

(1) 合唱教材で構成した題材（表現と鑑賞の関連付け／中学校）

市内中学校では、合唱活動が盛んに行われており、音楽科の授業においても、かなりの時間が合唱曲を教材とした表現の学習に充てられている。しかし、子どもたちの合唱の力は、合唱コンクールや学校行事における合唱活動の充実と相応して高まっているだろうか。豊富な時間を掛けて合唱表現を高め体験的に合唱活動の楽しさを味わっていても、合唱音楽の深さや豊かさを本当に感じ取ることに至っていないのではないか。子どもたちに、合唱音楽のよさや美しさ、豊かさを感じ取らせ、表現することで鑑賞する力が高まり、鑑賞することで表現が深まる、合唱で表現と鑑賞を関連付ける題材構成の可能性を探ってみることにした。

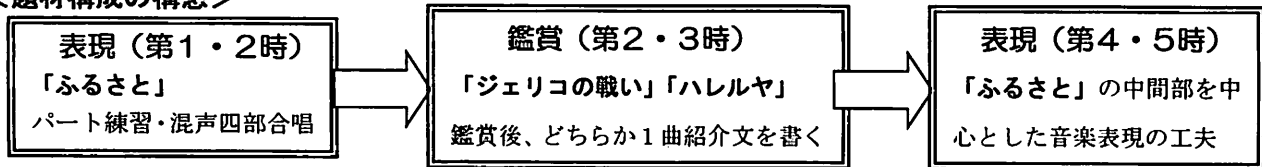
①授業実践「合唱表現の豊かさを味わおう」A 中学校3年生

－混声四部合唱「ふるさと」と「ハレルヤコーラス」、「ジェリコの戦い」

<題材の目標>

- ・混声四部合唱の厚みのある和声の響き合いや表現の豊かさ、美しさを感じ取る感性を高める。
- ・混声四部合唱の豊かな響きを味わって聴いたり、全体の響きを調和させて豊かに表現したりする力を育てる。

<題材構成の構想>



教材としたのは教育芸術社教科書2・3下の混声四部版「ふるさと」である。この編曲には、1、2番のあとにラララ〜で構成される中間部がある。この部分をどう表現して3番につなげるかが、表現の工夫の大きなポイントであると考えた。また、鑑賞教材として選んだ2曲は歌詞が日本語ではないことや、厚みのある和声的な響き、多声的な絡みがあること等、音や音楽そのものから合唱音楽の表現の豊かさを堪能できる名曲である。

鑑賞では、まずそれぞれの曲の「素敵だと思うところ」を「声色」「リズム」等いくつかの諸要素に着目してメモをさせ、その後、好きな1曲を選ぶ。このあと紹介文の記述の前に少人数のグループによる意見交換を位置付ける。意見交換は、同一の曲に偏らないように編成に留意して4人グループを作り、曲の魅力について語る。ただなんとなく伝えるのではなく、相手の話していることに対してよりくわしく聴こうと質問をしたり、相手の意見に対して反対意見を出したりすることによって、それぞれの曲の魅力について深く考えることができるのではないかと考えたからである。

その後の表現活動では、鑑賞後に合唱を味わう力が高まったところで、中間部を中心に範唱CDを聴いてから、表現の工夫をワークシートの楽譜に記号や言葉で記述する。記述した内容は、意見交換を経て学級全体で共有し、試して、妥当性のある表現につなげていく。

<授業の考察>

第3時のグループ活動（少人数の意見交換）では、初めは、同じグループの中でも、同じ曲を選んだ者同士、その理由について音楽的な理由から共感して自分の考えを補強していた。しばらくすると、違う曲を選んだ者同士の意見交換も始まり、最初は、「なぜ、その曲を選ぶのか理解できない」と相手の意見に全く否定的だった生徒が、話し合いが深まるにつれて相手の意見を認め尊重するようになる場面もあった。

また、意見交換を行ううちに、最初に選んだ曲ではない方の曲に変える生徒も数人いた。意見交換をすることによって、感受が深まり、曲に対する思いも深まり、自分一人で考えて書くよりも内容の深い紹介文を書くことができたと思う。

F「ジェリコは強弱の差がすごい。戦いを表している感じがする。男女のハーモニーがよかったと思う。」
 G「そうかなあ。ハレルヤは男声だけのところと女声だけのところがあって、だんだん盛り上がると思う。ジェリコは、暗いよね。」
 F「えっ、そう言われればそうだけど、でも、なんか、そういうところがいいんじゃない。戦いだから暗くなくちゃいけないだよ。」
 G「ああ、うーん。でも、やっぱ、ハレルヤは曲全体が明るくて力強い感じがするのがいいよね。」
 F「でもさ、ジェリコは暗くても元気がでるよ。」
 G「ハレルヤは華やかで元気がでるよ！」
 H「ジェリコ聴いても元気が出ないよ……。」
 G「そうだよね。」
 F「うん、まあ、あやしくて、不気味な感じもするけど……。でも、ジェリコがいいんだよ。」
 G「暗いけど……。引き立ててるってこと？」
 H「そうそう、奮闘してるんだよ。確かに明るくはないけど、なんか、こう、(手振りをいれて)来るのはわかる。」

図3 少人数の意見交換 発言例

第4時の「ふるさと」中間部の表現の工夫については、四声体の音の重なりに耳が慣れてきたという鑑賞の効果から、範唱CDの聴き方が深まったことが、ワークシートの楽譜への書き込みからうかがえた。ここでは、「自分のパートがどのように歌うか」だけでなく、他のパートも含めて4つのパートがどのような関わりをもっているか考えながら表現を工夫するように促した。ソプラノの主旋律が大きなフレーズでのびのびと歌われることが大切と気づき、それに対して、テノールは裏メロという表現で、オブリガートを和声に埋もれずに歌うとよいという記述、和声的に支えるアルトとバスは互いに聴き合いながらたっぷりとした音量で支え、フレーズの最後のアルトについて、「ちょっとメロディーみたいになるから少し強目」に表現してよいという記述等、それぞれの声部の役割と全体の響きを理解する学習の質が高まっていた。このような記述に対しては、十分満足できる状況と（A）と判断した。

このように、合唱曲の表現の中に鑑賞の学習を位置付けたことで、「鑑賞で重なり合いや厚みを意識したので合唱でも頑張りたい。」「自由曲についても話し合い、曲への考えを深めたいと思った。」等の関心・意欲の高まりが見られ、併せて、「ほかのパートの声を意識しながら歌うようになった。」「鑑賞で合唱について深く考える授業を行ったから、曲全体の流れを意識しながら強弱を気にした。」等、音楽表現の創意工夫においても質的な高まりが見られた。

課題としては、思いがあふれる余り、紹介文が長くまとまりのないものになってしまう生徒が少なくなかったことが挙げられる。鑑賞時の発問の吟味、ワークシートの工夫の必要性を感じた。

②授業実践「合唱表現の豊かさを味わおう」B 中学校2年生

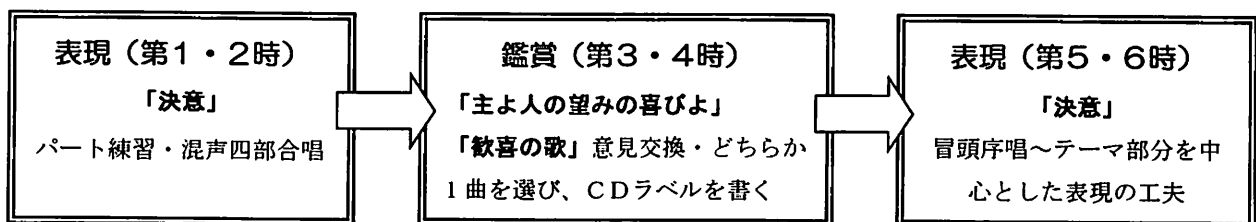
－混声四部合唱「決意」と

「主よ人の望みの喜びよ」、交響曲第9番「合唱付き」終楽章「歓喜の歌」〈抜粋〉

<題材の目標>

授業実践「合唱表現の豊かさを味わおう」Aに同じ。

<題材の構想>



表現領域の教材は、四声の響きを聴き取りやすく調和が味わえるもの、そのためには、アカペラ部分が含まれているもの、そして、転調によって和声の響きを意識しやすいもの、楽譜を見たときに音符が縦に4つ並んでいるという四声体の関係に気づきやすいということも意識して選択した。

鑑賞領域で取り上げる2曲は、本年度の鑑賞の学習で既に取り上げた作曲家の作品である。「主よ人の望みの喜びよ」「歓喜の歌」は、共に既習の内容と結び付けて、第3時の鑑賞の初めから合唱音楽の高い芸術性を味わわせることに有効であると考えた。また、鑑賞曲についても譜例を示した。2曲とも、和声的な重なりや多声的な掛け合い等テクスチャが見取りやすい譜例である。

ワークシートは、生徒の思考の流れを生かした構成にした。最終的には、知覚と感受の深まりが凝縮されるよう、「CDラベルの縦帯キャッチフレーズを考える」という設定にする。

鑑賞の学習では、「混声四部ならではの美しく豊かな響き」という軸がぶれないよう、音楽の諸要素をキーワードとして提示する。「どんな感じがしますか」という発問に対しては、「感じシート」を用いながら記入するよう促し、諸要素に迫る発問として「音楽のどんなところからそのように感じましたか」という項目をワークシートにあらかじめ書いておく。音楽を2回聴いたあとに、個の感受を互いに伝え

合う活動を取り入れる。全員が同じ曲にならないような4～6人グループを作り、自分の感じたことを報告するだけの活動に留まってしまうないように、「グループで語り合おう」という言葉を投げ掛ける。

その後、冒頭のアカペラから始まる序唱部分からテーマに掛けて、表現を工夫して合唱する。

<授業の考察>

第3時、鑑賞させるにあたり、聴く視点がずれないように「旋律、音の高さ、合唱、和声の響き」という4つのポイントを与えた。また、曲の雰囲気が変わるところを教師側から伝え、「主よ人の望みの喜びよ」は、全体を3つの部分に「歓喜の歌」抜粋部分（約7分）は、4つの部分に区切って示した。楽譜でも提示し、その区切りごとに音楽を形づくっている要素と結び付けて聴くようにしたところ、和声の変化、長三

和音や短三和音の響きの変化に気付くことができた。（図4）

図4 第3時 ワークシート 記入例

第4時では、それぞれの音楽に対して自分なりの価値を見いだしたものをさらに深めるため、意見交換をするという活動に入った。そのあと、「合唱のよさを伝えよう」と、ワークシート（図5）にCDジャケットの縦帯ラベルの記入欄を載せ、そこに「曲の魅力を書こう」と投げ掛けた。友達と語った中で鍛えられた作品に対する自分の価値がラベルに反映されるよう助言をしたところ、どうやら自分の感受した思いを、より具体的に価値観の違う相手に伝えられるか悩み、試行錯誤していた。実はこの試行錯誤が、より豊かな感受を育むために重要なことだと感じた。図5で示した生徒は、音楽を形づくっている要素を的確に捉え、そのことがこれらの曲の魅力につながっていると味わっており、前時のワークシートの記述内容と併せて総合的に判断し、十分満足できる状況（A）と評価した。

第5・6時では再び表現活動に戻し、「決意」を合唱した。表現と鑑賞を関連付けたことにより、鑑賞後の合唱活動に変化が見られた。今までは、自分のパートの音を正確に歌えば自然に音は重なり合い、よい合唱になると思っていた生徒たちが、自ら聴き合い響きを確かめ合いながら歌い合わせる姿へと変容した。豊かな響きになるために、どのような工夫

図5 「合唱のよさを伝えよう」 記入例

をしたらよいか具体的に自ら考える姿もあった。

(2) 日本の音楽で構成した題材（表現と鑑賞の関連付け／小学校）

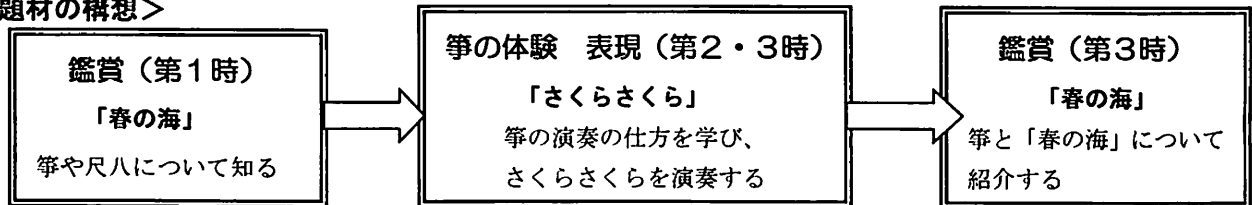
子どもたちは、和楽器に触れることはもちろん、日本の音楽を意識して聴くことがあまりない。我が国の音楽でありながら、祭り等でお囃子を耳にすることはあっても、親しむほど味わっていることが少ないという実態から、日本の音楽のよさを子どもたちに味わわせたいと考えた。そこで、今回の研究テーマである表現と鑑賞を関連付けた題材構成の工夫という観点から、日本の音楽に親しませ、味わわせるための手立てを考え、授業を行った。

授業実践「日本の音楽を味わおう」 小学校5年生 一筆の体験「さくらさくら」と「春の海」

<題材の目標>

- ・和楽器に触れることを通して、日本の音楽に興味・関心を持ち、我が国の音楽に親しむ。
- ・箏や尺八の音色を味わい、日本の音楽の特徴やよさを感じ取って鑑賞する能力を育てる。

<題材の構想>



小学校における日本の音楽の扱いは、鑑賞がメインで表現は発展という形である。「春の海」の鑑賞に箏の体験を取り入れることで、音色の特徴や奏法による効果等、実際に体験したからこそ知覚・感受できるものが豊かになり、鑑賞の質が高まり、日本の音楽の特徴やよさを味わうことにつながるのではないかと考えた。箏は、和楽器の中でも比較的容易に発音することができ、弾き方を変えると音の出方や音色が変わることが実感しやすい楽器である。そこで、できるだけたくさん楽器に触れることができるよう、箏は二人に一面用意した。

ワークシートは、子どもたちの思考の流れに沿ったものになるよう努めた。子どもたちの語彙は少なく、感じ取ったことを容易に言葉に変換することがむずかしい。そこで、第1時には、なかなか記入できない児童への支援として、「ゆったり」「なつかしい」「落ち着いた」等いくつかの言葉をワークシートにヒントとして入れた。その後、箏の体験を経て、第3時の後半で、「春の海」を鑑賞する。今度は、はじめ、なか、終わりに区切って、それぞれに速さ、箏、尺八という項目を立て、知覚・感受が深まるように促す。また、まとめの項目として、「箏を弾いたことがない人に、『箏の〇〇がすてきな。』という形で紹介してみよう」、「春の海を聴いたことがない人に『こんな曲だよ。』って教えてあげよう」という項目でワークシートに記入させる。

<授業の考察>

箏の体験では、子どもたちから、「いい音を出すために、爪を寝かさずにたてにするように気を付けた。」「はじめてことを弾いてみて、和風っぽい音が出ていて、やっぱり日本の楽器だなと感じた。」「ことは、弾き方で音の雰囲気が変わるということを感じた。」等の感想が出て、箏の演奏を楽しんでいた。「さくらさくら」は1時間でほぼ旋律をたどることはできるようになっており、第3時の冒頭から鑑賞に戻すことも考えたが、もう一息、表現の活動で日本の音楽のよさに気付かせたいと考え、「さくらさくらに合ったすてきな終わり方にするためにはどんな工夫をするとよいか。」と問い掛けた。すると、「最後の音をためる」「最後の音まで大切に弾く」等の記述が見られ、日本音楽独特の間（ま）や余韻を楽しんでいる様子が見え、授業の最後には、「またやりたい。」という声が聞かれた。

第1時の2つの楽器の音色の知覚・感受については、「箏は、はねる感じの音がした。」「尺八はかすれた音がする。」「尺八は音がふるえている。」等の断片的な聴き方に留まった。中には、最後まで飽きずに聴くことができなかつた子どもたちも見られた。その後、箏の体験を挟んだ後の第3時では、最後まで集中して聴くことができ、子どもたちの鑑賞への姿勢が明らかに変容した。さらに、曲の中で音楽がどのように変化していくか、箏や尺八の音色が音楽のどんな様子を表現しているのか等にも注目して鑑賞し、「春の海」の曲全体を味わって鑑賞することができた。特に箏については、箏を体験したからこその発見をすることができていた。(図6)

図6のワークシートの児童は、いずれも、箏の音色の特色や「春の海」の音楽的な特徴を的確にとらえており、そのよさや美しさを十分感じ取り味わっているため、鑑賞の能力の観点において、十分満足できる状況(A)と判断した。

本題材の最後に、子どもたちに日本の音楽に対する印象がどのように変化したか尋ねたところ、授業前よりも好きになった、親しみが湧いたとの反応が数多く見られた。和楽器を体験したことで日本の音楽を身近に感じ、興味をもって鑑賞し、そのことが最終的に「日本の音楽が前よりも好きになった。」という発言につながったことは、一番の大きな成果だったと考える。

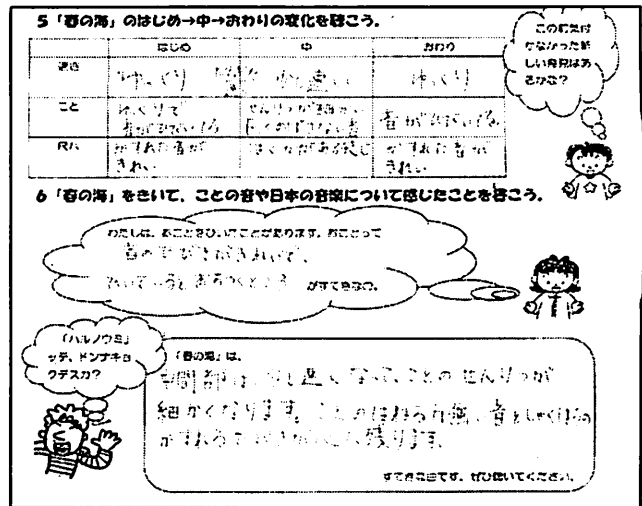


図6 第3時 ワークシートの記述から(鑑賞)

III 研究のまとめ

本研究を進める中で、子どもが知覚・感受する学習過程を大切にすることの重要性と、鑑賞の学習の充実が子どもの知覚・感受する感性を高めることに大きな効果をもつということを再確認した。作曲家について知らせる、時代背景について伝える、楽曲の構成や楽器について教える、そして、聴いて感想を書くという従前の鑑賞の授業であれば、表現の学習と関連付ける効果が成立しにくい。そこに、その鑑賞曲の音楽を形づくっている要素の知覚・感受が丁寧に行われる学習活動が設定されて、初めて、関連付ける意味が生まれる。提案授業を考える時点で確認した4つのポイントのうち、ワークシートの工夫、協同的な学習の設定、思考を促す発問と言葉掛けは、まさに、鑑賞の授業の改善に有効な手立てでもあった。本研究の成果として目の当たりにすることのできた、子どもたちの関心・意欲、音楽表現の創意工夫、鑑賞の力の高まった姿を拠り所として、今後も表現と鑑賞を関連付けた題材構成の工夫とその指導の充実に努めていきたい。特に、音楽づくり(中学校では創作)の学習は、鑑賞や器楽と関連付けて題材構成されることが非常に効果的であるとされており、市内小中学校で広く取り上げられることが可能な、モデルとなる題材構成が示されることが望まれる。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心からお礼を申し上げます。

【指導助言者】

川崎市立小学校音楽教育研究会長(川崎市立夢見ヶ崎小学校長)

保崎 万里

川崎市立中学校教育研究会音楽科部会長(川崎市立住吉中学校長)

大塚 和子